1. 秋
2. 美しい、可愛い
3. 林檎
4. イ
5. ア
6. 何度も会った
7. 君が藤村に

自作問題

1. 明治５年（1872）３月２５日（旧暦２月１７日）、筑摩県馬籠村（後の長野県西筑摩郡神坂村）に生まれる。本名島崎春樹。生家は江戸時代、本陣、庄屋、問屋をかねた旧家。父正樹、母ぬいの間の末子。  
   　明治１４年、９歳で学問のため上京、同郷の吉村家に寄宿しながら日本橋の泰明小学校に通う。明治学院普通科卒業。卒業後「女学雑誌」に翻訳・エッセイを寄稿しはじめ、明治２５年、北村透谷の評論「厭世詩家と女性」に感動し、翌年１月、雑誌「文学界」の創刊に参加。明治女学校、東北学院で教鞭をとるかたわら「文学界」で北村透谷らとともに浪漫派詩人として活躍。明治３０年には第一詩集『若菜集』を刊行し、近代日本浪漫主義の代表詩人としてその文学的第一歩を踏み出した。『一葉舟』『夏草』と続刊、明治３２年函館出身の秦冬子と結婚。長野県小諸義塾に赴任。第四詩集『落梅集』を刊行。『千曲川旅情のうた』『椰子の実』などは一世紀を越えた今も歌いつがれている。詩人として出発した藤村は、徐々に散文に移行。明治３８年に上京、翌年『破戒』を自費出版、筆一本の小説家に転身した。続けて透谷らとの交遊を題材にした『春』、二大旧家の没落を描いた『家』などを出版、日本の自然主義文学を代表する作家となる。明治４３年、４人の幼い子供を残し妻死去。大正２年に渡仏、第一次世界大戦に遭遇し帰国。童話集『幼きものに』、小説『桜の実の熟する時』、『新生』、『嵐』、紀行文集『仏蘭西だより』『海へ』などを発表。昭和３年、川越出身の加藤静子と再婚。昭和4年より１０年まで「中央公論」に、父をモデルとして明治維新前後を描いた長編小説『夜明け前』を連載、歴史小説として高い評価を受ける。昭和１０年、初代日本ペンクラブ会長に就任、翌年日本代表として南米アルゼンチンで開催された国際ペンクラブ大会に出席。昭和１８年、大磯の自宅で、『東方の門』執筆中に倒れ、８月２２日７１歳で逝去。大磯町地福寺に埋葬される。馬籠の菩提寺永昌寺には分骨として、遺髪・遺爪が埋葬される。 毎年命日の8月２２日には菩提寺である永昌寺にて、関係者らにより藤村忌が執り行われています。Wiki: [信州](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%BF%A1%E6%BF%83%E5%9B%BD)[木曾](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%9C%A8%E6%9B%BD%E5%9C%B0%E5%9F%9F)の[中山道](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%B8%AD%E5%B1%B1%E9%81%93)[馬籠](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%A6%AC%E7%B1%A0%E5%AE%BF)[[1]](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%B3%B6%E5%B4%8E%E8%97%A4%E6%9D%91#cite_note-magome-0)（現在の[岐阜県](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%B2%90%E9%98%9C%E7%9C%8C)[中津川市](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%B8%AD%E6%B4%A5%E5%B7%9D%E5%B8%82)）生れ。この馬籠のある長野県木曽郡山口村が岐阜県中津川市と越県合併をしてしまったために、藤村の出生地が岐阜県となってしまった.
2. ７，５（文語定型詩）
3. 17、『初恋』1897年藤村25歳の時に発行。
4. 藤村が初恋した時

|  |  |
| --- | --- |
| ［1］ | 水などを柄杓(ひしやく)・桶(おけ)などですくって取る。また、水道などによって容器にうつし入れる。《汲》 |
| ［2］ | 酒・茶などを飲むための器に注ぎいれる。また、それを飲む。 |
| ［3］ | （多く「酌む」と書く）事情・気持ちなどを好意的に解釈する。斟酌(しんしやく)する。 |
| ［4］ | 思想・流儀・系統などを受け継ぐ。 |

１３．１６歳

１４．君のおかげで恋のすばらしさを知る事ができた

１５．愛情

１６．普通に（最初花で実で道ができる）

１７．のろけ

１８．自分しか通らないから

１９．初めてと違う意味だから

２０．林檎